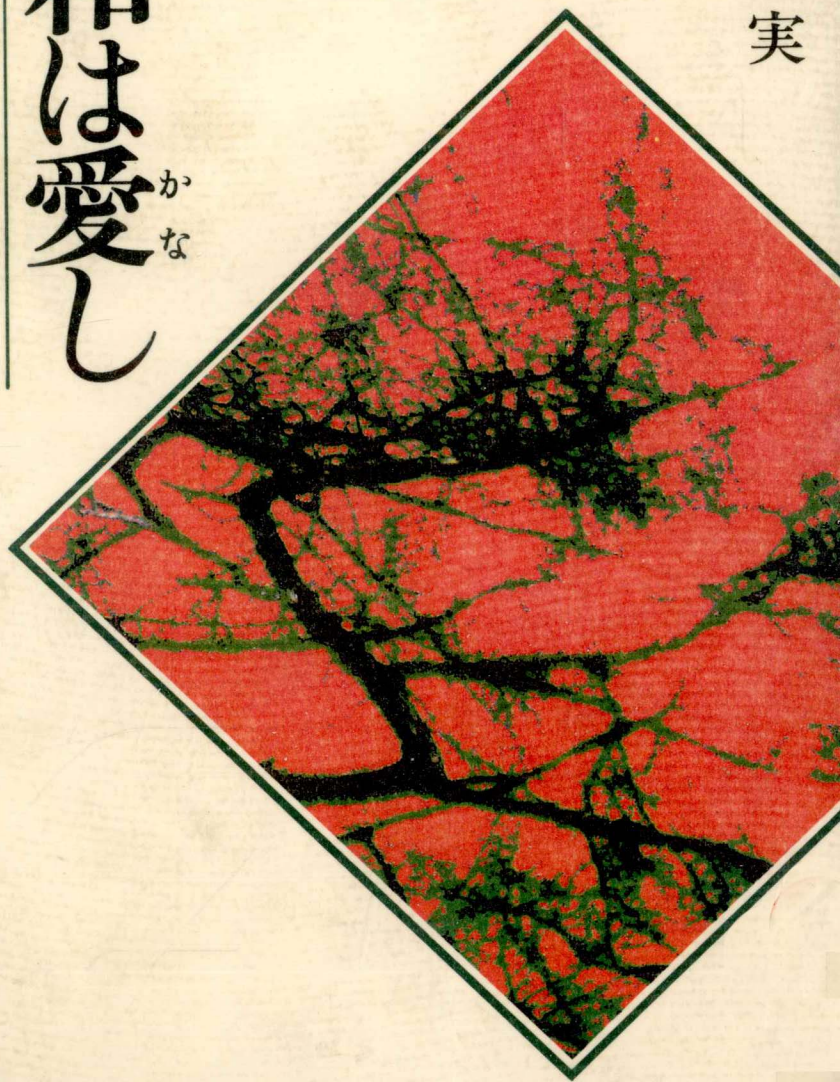


小野沢 実

昭和は愛かなし

『昭和萬葉集』秀歌鑑賞



講談社

小野沢 実

昭和は愛かなし

昭和萬葉集『秀歌鑑賞』

講談社

小野沢 実 (おのざわ みのる)

神奈川県海老名市国分出身。神奈川県師範学校卒。川崎市および藤沢市立小・中学校教諭を経て、神奈川県教育委員会指導主事となり、神奈川県藤沢市立藤ヶ岡中学校校長を最後に退職。同中学時代は文部省指定の道德教育を研究実践の上発表したり、校内暴力・非行生徒の根絶に尽力し教育界で注目された。また文学・人間教育問題について全国各地で講演し、NHKテレビ・テレビ朝日・テレビ神奈川等にも出演。現在、教育評論家、日本道德教育学会理事、聖園女学院常任顧問。

〔主著〕『現代っ子はすばらしい』『暴力非行は対話では防げぬ』『いのちひとりー山頭火観照ー』『如愚(一)ー山頭火・放哉観照ー』『如愚(二)ー良寛・緑平観照ー』その他多数。

昭和は愛^{かな}し————『昭和萬葉集』秀歌鑑賞

1990年8月20日 第1刷発行



定 価 1600円 (本体1553円)

著 者 小野沢 実

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 東京 (03) 945-1111 (大代表)

装 幀 志賀 紀子

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

© Minoru Onozawa 1990 Printed in Japan

万一、落丁本・乱丁本がありましたら、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは講談社学術局宛にお願いいたします。

ISBN4-06-205021-8 (術A)

まえがき

昭和の時代が、六十四年で終わった。思えば感無量なるものがある。「平成」——、という新しい時代を迎えた今、私は、昭和の切実な回想が必要なのだと思う。

それがあつて初めて、現時点での問題の理解のすべてが可能になり、新しい世紀の展望を開くことができるからである。言うまでもなく、日本の歴史上、かつてない激動を持った昭和の時代を基盤として、現代があり、未来があるからである。

むろん、既にさまざまな形で昭和の回想は公にされており、その歴史的評価も行われている。しかし、そのどれもが、もう一つ切実な姿で私たちに迫るものを持たないのを、私は残念に思つて来た。そんなある日、私はふと次の歌に出会い、それを口ずさんだ。

たまさかに白飯食めば眩しろめしはまぶしくて罪にも似たるおそれありけり

と。またさらに、

遠き人ゆたびし玉子のさえざえと白きはだへは貴み眺む

と。敗戦間もない昭和二十年代の庶民の、この声の切実さはどうだろうか。今の日本に、こうした心を、自分のものとして共感し得る者が、果たしてどれだけいるだろうか。

アメリカのある社会学者は、日本人を評して、

フルストマック（胃袋いっぱい）

エンプティソール（魂からっぽ）

と言ったという。

私は、日本人に対して、これ以上ない蔑視のことに触れ、少しも腹の立たぬ自分を不思議に思った。それは、現代日本人一般をまことに的確に、痛烈に言い当てて、むしろ拍手を贈りたいユーモアを持ったことばである。

千何百年の歴史の中で、常時貧しく餓え続けた日本民族が、ようやくにして達した暖衣飽食であれば、しばし、それをむさぼったとしても、決して罪とは言えないだろう。

しかし、もういい加減に物質一辺倒の姿勢を超克し、その「魂からっぽ」状況から目覚めていい時なのだと思う。

そして、その目覚めの最高の良薬となるものは、前掲の二首に代表される昭和の先輩庶民の苦闘忍従の姿なり、声々なのである。

まして、

ブローヌもつけず黒焦くろこげの人は女をみなが乳房たらしして泣きわめき行く

なり、

流れつきし兵の半裸屍はんらしだい体魚につつかれ拳丸ふぐりすでになし斯かかる死しも見つ

等の、原爆なり、戦闘の凄惨せいさんな状況を伝える作品に触れることが、私たちをその真によつて立つ基盤に立ちもどらせ、平和をはじめ、すべての問題の取組みへの、正しい方向づけをしてくれるのだ、と思う。

そうした意味で、『昭和萬葉集』全二十卷（講談社刊）を中心にした短歌群は、そのための良き資料を私に提供してくれた。私はここでそこに示された短歌の一つ一つを採り上げ、昭和の時代、その激動の中を生き抜いた人々の心を探ってみたいと思う。それが、昭和の時代が何であったかを、確かな

手ごたえで、私たちに示してくれると信ずるからである。

ところで、私は大正生まれだが、大正時代の記憶は全くと言っていいほどない。だから、私にとつての生きたという意識は、その初めから今に至るまで、ほとんど昭和の時代で一貫していることになる。それだけに、私の中には、「昭和」という時代への愛着の格別なものが存在する。それがこの書の表題を、『昭和は愛し』とした理由である。

しかし、『昭和は愛し』と言いながら、私の中にあるものは、昭和の時代への愛着なり、いとおしみだけではむろんない。むしろ、強烈に「昭和は悲し」の思い切なるものがあるのである。

あの太平洋戦争が始まった時、二十歳であつた私たちの世代は、その幼少期を世界的大恐慌と戦争への準備期の中に育ち、戦争の最中には、ほとんど一人残らずが狩り出され、戦争の被使用人とされ、最も大きな犠牲を強いられた。

私の親友と言える友人のほとんどは、その中で死んで行き、私も、戦後、病を得て永い間闘病生活を余儀なくされた。戦争から敗戦へと、私たちの世代に、青春と呼べる時代は全くなかつたということである。だから私の中には、昭和の時代そのもの、その中心をなした戦争への怨念おんねんと言つていいものさえ、実は深く潜在しつづけているのである。

だから、酔うと軍歌を高唱し、軍隊時代の思い出話をしきりにする人々を見かけると、気が重くなるし、私自身、一切そうしたことをしたことがない。戦争についてはむろん、私の青春時代について

語ることも、今までほとんどなかった。それは、私の生涯にとって、「悲しみの時代」そのものだったからである。

しかし、今ようやく晩年を迎えようとして、それらのもの、ひいては昭和の時代が何であつたかを考えてみたい思いにかられるようになった。それについて語ることは、好むと好まざるとにかかわらず、私にとって六十年來の人生の総括を意味し、そこを生きた証しを明らかにすることだからである。それが、この書を書いた理由でもある。

さらにまた、私が、昭和の時代について考えてみたい理由はもう一つある。それは、現代日本の庶民の力、その生きざまを、探ってみたいと考えたからである。

前述したように、既に昭和の時代についても、戦争についても、数多くの人々が語り、おびただしい書物が公刊されてはいる。しかし、私はその中で、現代庶民が、どのような哀歓をくぐりぬけ、どう生きたかを書いたものが、まれであることを残念に思ってきた。

いつの時代にあつても、庶民は被圧迫者として耐え、事實は、その内に秘めた巨大なエネルギーによって、時代を支えてきたはずである。それは、激動の昭和にあつても例外ではない。庶民の生きざま、その生ま生ましい哀歓ぬきには、その時代の真の理解は不可能なはずである。

私は、そのことを先に公刊した『憂き世ことわざ面白帖』——庶民の論理——（創造社刊）を書く間に強く感じた。ことわざに表現された先輩庶民の知恵、その眼力、バイタリテイ。被圧迫者でありなが

ら、その内面において自由奔放でさえあつた庶民の心に、私は繰り返し感動した。そして私は、そうしたことわざの中に示された先輩庶民の、民族を實質支えた英知なり力が、昭和の庶民にどう受け継がれているかを、ここで探つてみたいと思つた。

この書が、昭和に生を受けた人々にとってはむろん、明治なり大正に生まれて昭和を生きた人々にとつても、数少ない心の糧かじとなり、座右の書となることができば、身に余る光榮である。

また、本書で『昭和萬葉集』から採り上げた歌の数は一九九首に及ぶが、その鑑賞の中で、私の想像や憶測で述べている箇所がいくつかあると思うが、その点はお容赦ねがいたい。

なお、この書の公刊にあたたかいご理解を示された講談社学術局の生沼英夫氏をはじめ皆様に厚く謝意を表したい。

終わりに、本書の原稿を終わらせた折りの感慨二首を、ここに書き留めておくことを許されたい。

ものを書く時こそまことのわれなるかそこばくの著書に息づくわれよ

この世からわが去りて後もお残る著書に息づく生命かなしも

昭和は愛^{かな}し

目次

まえがき

1

プロローグ——四千万人への鎮魂歌

19

白き蝶ひろしまほろぶ炎の中に凍々しきかもよ舞ひてありけり

20

第一章 世界大恐慌の章

23

果しらぬ資源に富める米国も恐慌の前にたちろぐと云ふ

他一首

24

子等多くなりて月々金足らず妻と争ふ事の多しも

他一首

26

遊びに来るこの童女すら昼飯がなくて食べぬと云ふに驚く

他一首

28

政党を見限らんとする農民の心荒みを下心憂ふなり

他一首

30

此の国は如何にさびしきまひるまの帝都に暗殺つぎつぎ起る

他四首

31

号外のご多ひたひたと走り来る雪夜の闇を怖ぢにけるかも

他二首

35

若き人のひたむき心あはれなりただひたむきに死にけるものを

他一首

37

第二章 出征の章

41

たらちねは今宵限りと吾が背を流して賜ひぬ熱き据風呂

他二首

42

第三章 戦いの章

さがし物ありと誘ひ夜の蔵に明日征く夫は吾を抱きしむ——他一首 45

残さるるひとりさみしと言にいはず子呂欲しなどと僅に告げぬ——他一首 48

みかへりてしばし動かぬ夫はもよ天地も消えよ此の須臾の間に——他一首 50

兵と召されむをのこらの集ひにて子守唄ぞうたはれにける——52

草ぎりてゐし老が起ちて叫びたり生きて帰れとたしかに聞きぬ——55

営庭に裸をさらし撲たれつつさびしさびし人間を憎みてゐたり——他一首 60

汝が熱き息吹きまぢかにあるごとくふとおどろきぬ文よみをりて——他一首 65

死を決めし互の口に移さるる煙草を命の火ぞとわが見し——他一首 67

竹藪にて突きたる敵の少年兵を夜半の眼ざめに思ひ出だしぬ——他一首 70

頭部貫通銃創を負ひて氣の狂れし兵を突きとばして哭きつつ守護す——73

あかあかと屍を焼く火のいろの夕日より赤したちて見まもる——他一首 76

第四章

死の章

兵われにまつはるほたるいづくゆくたのしむに似て真闇をつたふ——他一首——78

銃も捨て剣も捨ててひたすらに生きんと兵等よろほひ歩く——他一首——79

鉄帽を冠りしままにうつむきて日本兵の屍流るる——他二首——81

はるばると来にし命かひとつ天に南十字星見ゆ北斗七星見ゆ——他二首——84

汐八しほ今日を限りのくれなるのみちあかりの炎のなかの家——他一首——86

はだしろき軀ならびてみちにふすくづれおちかかる炎にてりて——他二首——88

焼けあとにことしの燕きて啼けばいのちかなしみ頭上に仰ぐ——他一首——91

遊びゐる子を呼寄せて手を握り静かに父の戦死をば知らせぬ——93

天地にただひとりなる吾子が父はみ骨となりて我が手にかろし——95

秋ふかき夜ごろとなりぬ影の如く従ふ吾子と二人住みつ——97

手を胸に入れて触りたる両乳のかなしかも吾は夫なしにして——98

ほのぼのと亡き夫おもひ生くる日は幸薄き身と思はざりけり——99

吾が書きし百余の便り戻り来ぬはるけき海に艦は沈みて 101

ズロースもつけず黒焦の人は女か乳房たらし泣きわめき行く 103

大き骨は先生ならむそのそばに小さきあたまの骨あつまれり 他一首 104

子と母か繋ぐ手の指離れざる二ツの死骸水槽より出ず 他二首 106

静かなる夏のあしたの雨聴けばせめては吾子の骨清くあれ 108

亡骸の水葬されたる夕海に三声を哭きて汽笛黙せり 110

いきどほり怒り悲しみ胸にみちみだれにみだれ息をせしめず 他三首 111

第五章 敗戦の章 115

敗けし国の姫となりつかまどより灰かき出でて畑にまくなり 116

戸を押して出づれば外は月夜なり戦ひ罷みぬ生きのこりたり 117

なでしこの透きとほりたる紅が日の照る庭にみえて悲しも 119

玉音に泣き伏しるしが時ありて児らは東京へ帰る日を問ふ 121

あなうれしにもかくにも生きのびて戦^{たたかひ}やめるけふの日にあふ

122

あきぐさのなにをさぶしといはねどもかれゆくもののおのづからなる

124

くつわ虫なきなく夜^よ半^{はん}を目をさめてのこるいのちを思ふこのごろ

126

死なざりしこのうつそみは亡びたる国のあはれをただに見てゐる他一首

128

春夕べさびしきことをおもひをり。さびしきことになれむとすらし

132

めぐりゆく時の流れのことわりを知らざるものは哀れなりけり

135

もう二度とだまされぬぞと思ひながら今も何かだまされてゐる

137

やうな気がする

137

日本人入るを許さぬひとところ避けて通りてさびしとはせず

139

スマートにあかるき占領軍己^しが国のずんぐり小さき男らまづしく

141

第六章 平和の章

145

戦争はかくて終りぬ瀬戸の海小豆^{せうど}の島に遍路^{へんろ}鈴振る

146

街々^{まちまち}にあかるく電燈ともりたりともしびはかくも楽しかりしか他一首

147

忘れゐたりし唐もろこしのそよぐ音明るき家にひねもす坐る

149

忘れゐしものの心地に佇ちて聴く夕日の丘のかなかなの声

他一首

150

無量光舞ひ来し雪のとまりたる睫毛を寒みしばたたきけり

他一首

152

二股に岐れて咲ける辛夷ばなさかりの午をたふとしと思ふ

他一首

154

第七章

待つ章

157

いのち死ねといづこの母が希はむやかつてのわれは死ねと送りき

158

俘虜葉書僅か三十字のカナ文字に愛しや夫の癖の見たる

他一首

159

島ごもる虜囚のおもひせつなくて流るる星はみな海に落つ

162

野草刈り一人離れし風の音にわが子の年齢を数えへるにけり

他一首

163

朝明けしシベリヤの野に湖のごと見えてかぎりなき蕎麦の花咲く

166

海遠くかびてとどきしそこばくの故国のきんし火をつけず吸ふ

167

いつまでも長き夕焼見つるて堪へがたきかな日本思ふは

他一首

169

姑にみせても恥かしからぬ手紙のみ書き給ふ人よときにさびしき

172

第八章 生還の章

生き死にもいまだわかねばうつしゑになほ朝朝の飯をささぐる——他一首——173

黄昏の庭にまさしく子は立てり現身生きてあな還りきつ——178

還り来し夫のかたへに飯を盛るかかる日恋ひて十年経にけり——179

わが胸に置かれし夫の掌の温み夜半に幾度も醒めてたしかむ——181

われゆゑに敗残の身をかへりしとかなしき君に今ぞまむかふ——182

霞みつつ紀伊の国見ゆ日本見ゆいのちはつひに帰り来にけり——他三首——184

涙浮べ駅に迎ふる母見れば生きゐしことは斯くもうれしき——他二首——186

はじめて逢ふ七つの吾子が面はゆきそぶりに見せてわれにつきまとう——189

隣室に妻が帯とく音きこゆ幾年ぶりにわれ還り来し——191

戦ひて死なざることのかなしみを思ふことありある夜ひそかに——193

嫁ぎゐし君を恨まむこともなし戦ひはかくて終りしいまを——他二首——195

山ふかき湯の宿にして復員の若者らおほよそ戦語らず——他一首——198